

第一章 價値（一）

アダム・スミスは、価値という語には二つの意味があるとし、ある対象の有用性と、それを保有することで得られる他の財を購買する力を挙げ、前者を使用価値、後者を交換価値と呼んだ。さらに彼は、使用価値が大きいものはしばしば交換価値が小さく、その逆もまたしばしば見られると述べ、水や空気は極めて有用で生命に不可欠だが、通常はそれと引き換えに何も得られない一方、金は空気や水ほど実用的ではないものの、多くの財と交換できると説明した。

したがつて、効用は交換価値を測る基準にはならないが、交換価値の成立には不可欠である。ある財がいかなる点でも有用でなく、つまり私たちの満足に全く寄与しないなら、たとえどれほど希少であっても、また手に入れるのにどれほどの労働を要しても、交換価値は生まれない。

効用をもつ商品の交換価値は、希少性とそれを入手するのに必要な労働量という二つ

の要因に由来する。

希少性だけで価値が決まる財がある。追加の労働によって供給を増やすことができないため、一般に見られる「供給が増えれば価値が下がる」という関係は成り立たない。希少な彫像や絵画、入手が難しい書籍や貨幣、特定の土壌で育つたぶどうから造られる独特の品質をもつワインなどがこれに当たる。その価値は当初の生産に要した労働量とは無関係であり、それを所有したいと望む人々の富の水準や嗜好の変化によって変動する。

しかし、これらの品目が日々市場で取引される財全体に占める割合は極めて小さい。人々が求める財の大半は労働によつて生産され、必要な労働を投じる意思があるなら、それらは一国に限らず多くの国でほとんど限りなく増やせる。

したがつて、本書で商品、その交換価値およびそれらの相対価格を定める法則について論じる際に意味する商品は、常に、人間の労働によつてその数量を増やすことができ、かつその生産において競争が制約なく働くものに限られる。

社会の初期段階では、各財に投入された労働量の相対的な大きさだけが、これらの財の交換価値や交換比率を定める基準とされている。

3 第一章 価 値 (一)

財の真の価格、すなわちそれを得ようとする者にとつて本当にかかる費用は、その獲得に要する労苦に等しい。また、それをすでに獲得した者が手放したり他の財と交換しようとすると際の真の価値は、自分が省くことができ、他者に負わせることのできる労苦の量である。さらに、労働は、あらゆるものを手に入れるために最初に支払われた元の購買代価である。資本の蓄積や土地の私有がまだ成立していない初期の素朴な社会では、財の獲得に必要な労働量の比率だけが交換の基準、すなわち交換比率の拠り所になる。例えば、狩猟社会でビーバー一頭を得るのに、鹿一頭を得るのに比べて二倍の労働がかかるなら、ビーバー一頭は鹿二頭と交換されるのが自然である。また、通常二日または二時間の労働の産物は、一日または一時間の産物の二倍の価値をもつのが自然である。

人間の生産活動によつて数量を増やせないものを除けば、あらゆる対象の交換価値の基礎はこの点にあるという見解は、経済学において極めて重要である。というのも、この分野において、「価値」という語にともなう曖昧で漠然とした観念ほど多くの誤りや意見の相違を生み出している源はほかにないからである。

財の交換価値がその財に実現した労働量によつて決まるとき仮定するなら、投下される労働量が増えるほどその財の価値は高まり、減るほど下がる。

アダム・スミスは交換価値の源を労働に置いたにもかかわらず、本来なら各財の生産に投じられた労働量に応じて価値が増減すると一貫して語るべきところを、実際には穀物や労働を価値の標準とし、対象が市場でどれだけの労働を指揮できるかを基準に語つたため、体化労働ではない指揮できる労働量を体化労働と同一視している。たとえば労働の能率が二倍となつて同じ時間で産出が二倍に増えれば、その財と引き換えに受け取れる量も必ず以前の二倍になるかのように述べ、あたかも両者が同値であるかのように扱つている。

もし労働者への報酬が常に産出高に比例するなら、ある財の生産に投入された労働量と、その財で購買できる労働量は一致し、どちらを用いても他の財の価値変動を正確に測定できるはずである。ところが実際には両者は一致せず、前者は多くの状況では不变の基準として働き他の財の価値の変動を正しく示す一方、後者は比較対象の財と同様に変動する。アダム・スミスは、金銀のように変動的な交換媒体は他のものの価値の変動を決定する目的に不適切であることをきわめて巧みに示したが、それにもかかわらず自身は穀物や労働を基準に据え、金銀に劣らず変動的な媒体を選んでいる。

金と銀の価格は、豊富な新鉱床や新鉱脈の発見で大きく変動し得るが、そうした発見

は極めてまれで、その影響も強いとはいえる比較的短い期間に限られる。また、鉱山の操業に用いられる技術や機械が改良され、同じ労働量でより多く産出できるようになれば、これも価格の変動をもたらす。さらに、世界への供給が長年続いた後に産出が減少することからも変動は生じる。では、穀物はこうした要因から免れているのか。農業の改善や農機具の進歩に加え、他国で肥沃な新天地が開墾されれば、輸入が自由な市場のどこでも穀物の価値に影響し、結局は変わる。逆に、輸入の禁止や制限、人口と富の増加、そして劣等地の耕作により増産に要する追加の労働が増えて供給の拡大が難しくなると、穀物の価値は押し上げられる。労働の価値も同様に一定ではなく、社会の状況が変わることびに需給の関係に左右されるうえ、賃金が支出される食料やその他の生活必需品の価格にも左右される。

同じ国でも、ある時期には一定量の食料や必需品を生産するのに要する労働量が、別の遠い時期の二倍に達することがある。それでも労働者の賃金はほとんど下がらないことがありうる。もし前の時期の賃金が一定量の食料や必需品で支払われていたのなら、その量が減つていったら労働者はおそらく生きていけなかつただろう。このとき、食料や必需品は、生産に必要な労働量で見れば価値が一〇〇パーセント上昇したことになるが、

それらと引き換えに得られる労働量で測れば、その価値の上昇は極めてわずかにとどまる。

この指摘は、二つ以上の国についても同様に言える。米国とポーランドでは、一年の労働で生み出される穀物の量はイングランドのそれを大きく上回る。では、三国の他の生活必需品が同程度に安いと仮定すれば、各国において生産の容易さに比例して労働者に与えられる穀物の量が決まると結論づけるのは、重大な誤りではないか。

もし労働者の靴や衣服が機械の改良によって、いま必要な労働量の四分の一で生産できるようになれば、価格はおおむね七五パーセント下がると見込まれる。しかし、その結果として労働者がコートを一着ではなく四着、靴を一足ではなく四足という具合に恒久的に消費できるようになるわけではない。賃金はやがて、競争の効果と人口増加の刺激によって、賃金が支出される必需品の新たな価値水準に見合うように調整される。こうした改良が労働者の消費するすべての品目に広がったとしても、改良の及ばない他の財と比べたときのそれらの交換価値は大きく下がり、必要労働量も著しく減るが、数年後には労働者が得る恩恵の増加は、あつたとしても極めてわずかにとどまる。

したがって、アダム・スミスにならって「労働はときに多くの商品を買い、ときに少

なく買う。変わるのは商品の価値であつて、労働の価値ではない」とし、ゆえに「価値が決して変わらない労働こそが、いつ、どこでも、すべての商品の価値を測り比較できる最終的かつ実在的な唯一の尺度である」と主張するのは妥当ではない。他方で、アダム・スミスが以前に述べたように「異なる商品を得るのに必要な労働量の比率こそが、互いに交換する際の唯一の規準となる」という指摘は正しい。要するに、労働が生み出せる商品の比較数量が諸商品の現在または過去の相対価値を定めるのであって、労働者が自らの労働の対価として受け取る商品の比較数量がそれを定めるのではない。

現在も将来も、その生産に要する労働量が常に一定である財が一つでも見つかれば、その価値は変わらず一定となり、ほかの財の価値変動を測る確かな標準になり得る。だが現実にはそのような財は見いだされておらず、価値の標準を定めることはできない。そこで理論をより確かなものにするため、標準が備えるべき条件を明らかにして整理し、財どうしの相対価値を左右する要因を特定し、その影響の大きさを見積もることが重要である。

ただし、価値の基礎を労働に置き、財の相対価値が相対的な労働量で決まると述べるときにも、私は、労働の質の違いや職種の違いによって一時間や一日の労働を同じ物差

しで比べにくいという事実を無視しているわけではない。質の違ひに対する評価は市場の取引の過程で実務上支障のない精度に速やかに調整され、その基準は主に労働者の技能の相対水準と労働強度に依存する。この尺度はいったん確立されると大きくは変わらず、たとえば宝飾職人の一日の労働が一般労働者の一日の労働より高い価値をもつなら、その差はすでに価値尺度に妥当な形で織り込まれて いる。

したがつて、同じ商品の価値を異なる時点で比べるとき、その商品の生産に必要な労働の熟練や強度の差は両時点で等しく作用するため、基本的には考慮しなくてよい。同じ種類の労働について時点をまたいで比較すると、投入労働量が一〇分の一、五分の一、または四分の一だけ増減すれば、その割合に応じて商品の相対価値も比例して増減する。

現在、布地一枚の価値はリンネル二枚に相当し、一〇年後には布地一枚の通常の価値がリンネル四枚に相当するなら、布地の生産に要する労働量が増えたか、リンネルの生産に要する労働量が減ったか、またはその両方が働いたと結論してよい。

本書が扱うのは財の絶対価値ではなく、相対価値の変動がもたらす影響である。したがつて、労働の種類ごとの評価の差を比較検討する必要性は高くない。もともと不均衡があり、ある手仕事の熟練に別の手仕事よりも多くの創意工夫、技能、時間が要るとして

も、そうした差は一世代から次世代へおおむね保たれ、年々の変動も極めて小さい。したがって、短期的にみれば相対価値への影響はわずかにとどまる。

すでに述べたように、労働と資本の各部門における賃金率および利潤率の部門間の比率は、社会が豊かでも貧しくても、前進していくても停滞していくても後退していくても、大きくは変わらない。社会全体の福祉を左右する変動は賃金率と利潤率の一般水準を動かすが、結局は各部門に等しく及ぶ。したがって、その部門間の比率は保たれ、少なくとも相当の期間は、この種の変動によつて容易に変わらない。

「国富論」からの引用によれば、異なる財を手に入れるのに要する労働量の比が交換比率を定める唯一の基準であることをアダム・スミスは十分に認めているが、その適用を資本が蓄積され土地が私有される以前の初期社会に限定している。あたかも、利潤や地代が支払われる段階では、生産に必要な労働量とは独立に、それらが商品の相対価値にいくらか影響するかのように。

しかし、アダム・スミスは、資本の蓄積や土地の私有が相対価値に及ぼす影響をどこにおいても分析していない。したがって、生産に要した労働量の比較が財の交換価値に影響するという広く認められた関係が、資本の蓄積や地代の支払いによってどの程度修

正されるかを明らかにすることが重要である。

第一に、資本蓄積についてである。アダム・スミスが言及する初期段階、つまり猟師が道具を自ら用意する自給的な段階でも、獲物を倒すには、たとえ猟師自身が作り蓄えたものであっても、ある程度の資本が必要である。武器がなければビーバーもシカも仕留められない。したがって、これらの動物の価値は、仕留めるのに要する時間と労働だけでなく、その達成を助ける猟師の資本たる武器を用意するのに要する時間と労働にも左右される。

ビーバーは接近が難しく、高い命中精度を要する武器が必要で、その製作にはシカ猟用の武器より多くの労働と手間がかかると仮定する。このとき、獲物の獲得に必要な総労働量が大きいほど高く評価されるという原則に照らせば、ビーバー一頭の価値はシカ二頭の価値を上回る。これは全体として必要な労働がより多いためである。

ビーバーや鹿を捕るための用具を所有する側と、捕獲の労働を提供する側が別であつても、相対価格は用具の製作と捕獲に投じられた実労働の量に比例する。資本が労働に比べて豊富か希少かという状況や、生活に必要な食料や必需品の供給状況がどう変わつても、どちらの仕事に対してであれ等しい価値の資本を提供した者の取り分が産出の一

分の一、四分の一、八分の一となり、残りが労働者の賃金として支払われることがあつても、相対価格は変わらない。利潤率が五〇、二〇、一〇パーセントのいずれであれ、賃金が高くとも低くとも、その影響は両方の仕事に等しく及ぶからである。

社会の分業が進み、漁に必要なカヌーや道具、仕掛けを用意する人と、農業の初期段階で用いる種子や簡素な機械を用意する人とに役割が分かれても、同じ原則が成り立つ。生産物の交換価値は生産に投入された労働量に比例し、直接の作業だけでなく、その作業を有効にするために必要なあらゆる道具や機械の製作に費やされた労働まで含めて決まる。

改良や進歩が重なり、社会が成熟して芸術や文化、商業が花開いても、財の交換価値を定める原理は変わらない。靴下を例にとれば、その相対価値は、製造から市場に出すまでに要する労働の総量で測られる。具体的には、原綿が栽培される土地の耕作、靴下を製造する国への輸送（運賃には、それを運ぶ船の建造に投じられた労働の一部も含まれる）、紡績や織布、工場の建屋や機械を建設・据え付けた技師、鍛冶、大工の労働、小売に携わる人々やほか多くの人々の労働である。こうした労働の合計が、靴下が他の品とどれほど交換されるかを定め、同時に他の品に投じられた労働の量が、靴下と引き

換えに差し出されるそれらの量を規定する。

交換価値の眞の基盤であることを確かめるため、原綿が靴下へ加工され、市場に出て他の財と交換されるまでのさまざまな工程のどこかで労働を節約する手段に改良が導入されたと仮定し、その影響を検討する。原綿の栽培に従事する人手が減り、輸送に従事する船員やその輸送に用いられる船を造る造船工が少なくて済み、建物や機械の建設・設置に要する人手が減るか、それらがいつそう効率的になれば、靴下の価値は下がり、他の財と引き換えに受け取れる量も少なくなる。これは生産に必要な労働量が減るためにあり、同様の労働節約が起きていない他の財とは、靴下一単位と引き換えに得られる量が以前より少なくなる。

労働を節約すれば、その対象が当該財そのものの製造に必要な労働か、その生産を支える資本の形成に必要な労働かを問わず、その財の相対価格は必ず低下する。いずれの場合でも、漂白・紡績・織布といった製造に直結する工程の担い手が減つても、また船員や運送業者、技術者、鍛冶職人など生産を支える間接部門の人員が減つても、靴下の価格は低下する。前者では、その節約分はもともと靴下だけに投じられていたため、節約の効果はすべて靴下に帰属し、後者では建物や機械、輸送手段が用いられる他の財に

も配分されるため、靴下に帰属するのは一部に限られる。

あらゆる社会で、生産に投じられる資本は必然的に耐久性に限りがあり、労働者の口に入る食料や身につける衣服、働く場となる建物、労働を助ける道具はいずれもやがて消耗する。ただし、こうした資本の寿命には大きな差があり、蒸気機関は船より長持ちし、船は労働者の衣服より長持ちし、労働者の衣服は彼が消費する食料より長持ちする。

資本は劣化や消耗の速さと再生産の必要度に応じて、流動資本または固定資本に分類される。高価で耐久性のある建物や機械を保有する醸造業者は、固定資本の割合が大きいとされる。これに対して、資本の多くを賃金の支払いに充て、その賃金が食料や衣料など建物や機械よりも早く消費される財の購入に向かう靴職人は、流動資本の割合が大きいとされる。

二業種が同額の資本を用いても、固定資本と流動資本への配分は大きく異なることがある。

また、二人の製造業者が固定資本と流動資本の投入額を等しくしていても、固定資本の耐用年数には大きな差があることがある。片方は一万ポンドの価値の蒸気機関を、もう片方は同額の船舶を保有している。

商品の相対的価値は、生産に要する労働量の多少によって左右される。さらに、投入される固定資本の価値や耐用年数にばらつきがある場合には、賃金の上昇とそれに伴う利潤の低下によって、商品の相対的価値も変動する。

社会の初期段階において、猟師の弓矢と漁師のカヌーと用具が同じ価値と耐用年数をもち、同量の労働で作られていると仮定する。この条件なら、猟師が一日で得る鹿の価値は漁師が一日で得る魚の価値と一致し、魚と獲物の相対的な価値は産出量や賃金・利潤の水準ではなく、各財に投入された労働量だけで決まる。たとえば、漁師のカヌーと用具の価値が一〇〇ポンドで耐用年数は一〇年、彼が一〇人を雇い年間の労働費が一〇〇ポンドで、一日に二〇尾のサケを得るとする。同様に、猟師の武器の価値も一〇〇ポンドで耐用年数は一〇年、彼も一〇人を雇い年間の労働費が一〇〇ポンドで、一日に一〇頭の鹿を得るなら、自然な交換比率は鹿一頭にサケ二尾となる。産出のうち労働者に分配される取り分が大きくても小さくとも、この比率は変わらない。利潤に関する問題では、賃金として支払われる割合はきわめて重要である。賃金が低ければ利潤は高く、賃金が高ければ利潤は低くなるからである。しかし、それでも魚と獲物の相対価値には少しも影響しない。両部門で賃金は同時に高くなったり低くなったりするからである。

漁師が賃金負担が重いことを理由に交換でより多くの魚を求めても、漁師は自分も同じ条件だと返すだけである。したがって、賃金や利潤の変動や資本蓄積の進み具合にかかわらず、一日の労働で双方が同じ量の魚と獲物を得る限り、自然な交換比率は鹿一頭にサケ二尾である。

同じ労働量で魚の漁獲量が減るか、獲物の獵獲量が増えれば、魚の価値は獲物に比べて高まる。逆に、同じ労働量で獲物の獵獲量が減るか、魚の漁獲量が増えれば、獲物の価値は魚に比べて高まる。

仮に、価値が不变で、時や状況に左右されず常に同じ労働量で獲得できる基準財が存在するなら、その基準財を尺度にして魚と獵獸の価値を比較することで、価値変動のうちどれだけが魚の価値に作用する原因によるものか、またどれだけが獵獸の価値に作用する原因によるものかを特定できる。

貨幣を価値の不变尺度とみなすとする。鮭一尾が一ポンド、鹿一頭が二ポンドなら、鹿一頭は鮭二尾に相当する。ただし、鹿の取得に要する労働が増えるか、鮭の取得に要する労働が減るか、あるいはその双方が同時に働けば、鹿の価値が鮭三尾分になることもある。この不变尺度があれば、それぞれの要因がどの程度作用したかを容易に確かめ

られる。鮭が一ポンドのままで鹿が三ポンドに上がれば、鹿の取得により多くの労働が必要になつたと判断できる。鹿が二ポンドのままで鮭が一三シリング四ペンスで売られるなら、鮭の取得に要する労働が減つたといえる。さらに鹿が二ポンド一〇シリングに上がり、鮭が一六シリング八ペンスに下がるなら、双方の要因がこれらの商品の相対価値の変化に作用したと結論づけられる。

賃金がどう動いても、両商品の相対価値は変わらない。利潤率を一〇パーセントとすれば、流動資本一〇〇ポンドは利潤込みで一一〇ポンドの回収が必要になる。固定資本一〇〇ポンドは、利潤率が一〇パーセントなら毎年一六・二七ポンドを回収すればよい。というのも、金利一〇パーセント・期間一〇年の年金の現在価値は一〇〇ポンドに等しいからである。したがつて、獵師の獲物の年間売上高は一二六・二七ポンドとなる。漁師についても資本の量・内訳・耐久性が同じなので、同じ利潤を得るには同額で販売する必要がある。仮に賃金が一〇パーセント上がり、各業種の流動資本も同率で増えるとしても、影響は両者に等しく及ぶ。両者とも従来の産出量を維持するのに必要な資本は一〇〇ポンドではなく一一〇ポンドとなるが、売上高は一二六・二七ポンドのまま変わらない。結果として相対価値は不变で、利潤率は両業種で同程度に低下する。

諸商品の価格は上昇しない。なぜなら、諸商品を評価する貨幣の価値は仮定により不変であり、その貨幣の生産に要する労働量も常に一定だからである。

貨幣を供給する金鉱が国内にあると仮定すれば、賃金が上昇した後は、かつて二〇〇ポンドで得られたのと同量の金を得るのに二一〇ポンドの資本が要る。猟師や漁師が資本に一〇ポンドを上乗せする必要があるのと同じ理由で、鉱夫にも同額の上積みが必要になるからである。必要な労働量は増えないが、賃金単価が上がるため、猟師や漁師が獲物や魚の価値を引き上げようとするのと同様に、鉱山主も金の価値を引き上げようとする。この誘因が三つの職業に等しく作用し、賃金上昇の前後で各従事者の相対的な地位や状況が変わらない限り、獲物、魚、金の相対価値は不变である。賃金が二〇パーセント上がり、その結果として利益率が多少低下しても、これらの財の相対価値にはいさかの変化も生じない。

同じ労働と固定資本で魚だけが多くとれ、金の产出や獣獸の捕獲量が増えないなら、魚の相対価値は金や獣獸に比べて下がる。一日の労働でとれるサケが二〇尾から二五尾に増えれば、サケ一尾の価格は一ポンドではなく一六シリングになり、シカ一頭と交換するには二尾ではなく二尾半が必要になる。一方、シカの価格は従来どおり二ポンドで

ある。逆に、同じ資本と労働での漁獲量が減れば、魚の相対価値は上がる。結局、一定量の魚を得るのに要する労働の増減だけがその交換価値を上下させ、魚の交換価値の変動は必要労働の増減割合を超えない。

他の財の価格変動を測る不变の尺度があると仮定すると、各財の価格が持続的に上昇し得る上限はその生産に追加で必要となる労働量に比例する。追加の労働が不要である限りそれらの価格は上がらない。賃金が上がってもそれらの貨幣表示の価格は上がらず、また、追加労働を要さず、固定資本と流動資本の比率が同じで、固定資本の耐久性も等しい他の財に対する相対価格も変わらない。他方、比較対象となる他の財の生産に必要な労働が増減すれば、その財の相対価格は直ちに変動するが、その理由は必要労働量の変化であり、賃金上昇ではない。